

名古屋城表二の門発掘調査 現地説明会資料

名古屋城調査研究センター

名古屋城表二の門とは

名古屋城表二の門は、江戸時代の姿を今に残す貴重な城門として、重要文化財に指定されています(昭和25年8月29日指定)。天守や本丸御殿がある本丸の玄関口であり、城内有数の堅固なつくりとなっています。門は高麗門と呼ばれる形式で、総鉄板張りの門扉や敵を鉄砲で迎え撃つために土塀に開けられた狭間などの防御設備をみる事ができます。門両脇の土塀背面にかつてあった雁木(石積みの階段)もそのひとつです。

表二の門は経年劣化が進行しているため、大規模修理工事を計画しています。修理工事に先立って雁木の痕跡を確認し、整備の可能性を検討するため発掘調査を実施しました。

雁木ってなに?

雁木とは、石垣へ上るための石積みの階段のことです。水鳥の雁が群れをなして空を飛んでいる様に似ていることから名づけられたといわれています。敵から攻められた際、雁木を使って石垣の上まで駆け上がり、土塀の狭間から鉄砲や弓矢で反撃するために設けられたと考えられます。

名古屋城では、表二の門や二之丸東二之門、本丸大手馬出(現存しない)など、守りの要となる主要な門や馬出に雁木が作られました(図2)。



図1 名古屋城表二の門(正面、南から)



図2 名古屋城二之丸東二之門でみられる雁木

発掘調査で見つかったもの

令和4・5年度で雁木の痕跡を探る2度の発掘調査を実施したところ、以下の主な発見がありました。

- ① 土塀の裾部にて、高さが揃う切石が並んで出土しました。雁木の最下段と考えています。
- ② 土塀の斜面部にて、丸い石が一面に詰まっている状況を確認しました。雁木背面の遺構と考えています。
- ③ 雁木と接する石垣にて、階段状の加工痕を確認しました。雁木が接する箇所を加工した痕跡と考えています。

発掘調査で分かったこと

発見① 雁木の最下段について

- ・調査前は江戸時代にあった雁木が大正時代の頃に撤去されたと考えていましたが、発掘調査によって最下段の1段分のみ残っていることが分かりました(図3)。
- ・出土した雁木は一部でひっくり返されていたり、江戸時代中期以降からみられる小さな矢穴がつくなど、少なくとも1度は積み直されていることが分かりました。

発見② 雁木背面の遺構について

- ・斜面一面で丸い石を確認しました。本来、雁木の裏に敷き詰められていた石が、雁木を撤去した際に崩落したものと思われます。ただし、部分的に平坦面などがみられ、雁木設置時の痕跡を示す可能性があります。

発見③ 石垣の階段状加工痕について

- ・雁木と接していた石垣面で部分的に階段状の加工痕が残されていることを確認しました。これは雁木を設置する際にうまく噛み合うように加工した痕跡と考えられます(図4)。

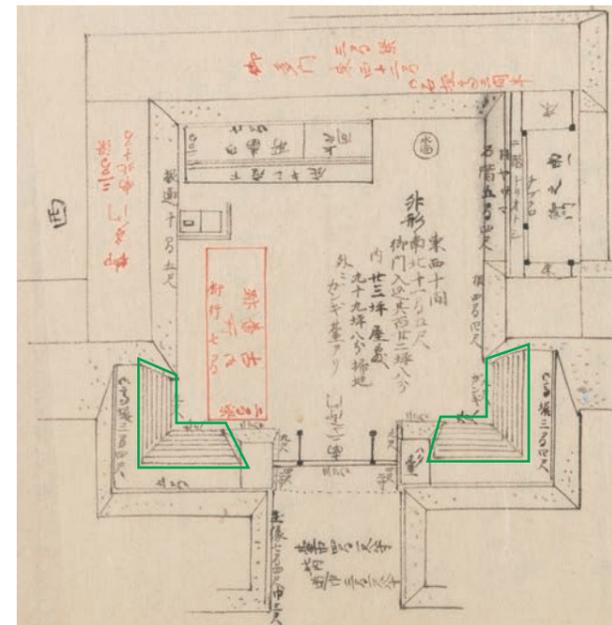


図3 江戸時代後期の『金城温古録』に描かれた表二の門(名古屋市蓬左文庫所蔵。緑線にて雁木範囲を加筆)

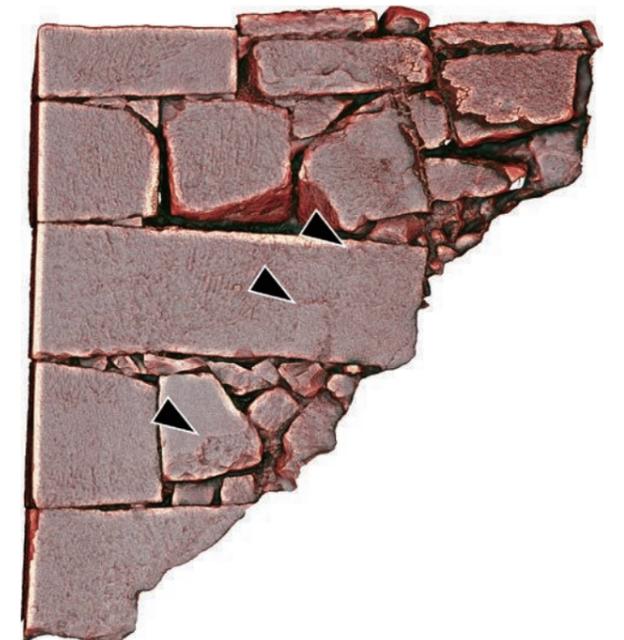


図4 西側土塁調査区 石垣加工痕可視化処理画像(矢印が階段状加工痕の出隅箇所)

備考

- ・西の丸御蔵城宝館にて、令和4年度の発掘調査成果を展示しております(9月20日まで)。
- ・令和元・4年度の発掘調査成果を整理した報告書『名古屋城表二の門試掘調査報告書』は、名古屋城公式ウェブサイトで公開しています。

※本資料は調査中の所見を基に作成しているため、その後の調査において見解が変わる可能性があります。

表二の門発掘調査ガイドマップ



図5 表二の門発掘調査 調査区オルソ画像（調査前オルソ画像に重ねたもの）



図6 西側土塁調査区 調査状況（北東から）



図7 西側土塁調査区 雁木背面の遺構検出状況（部分的に平坦面や垂直面が残る）



図8 東側土塁調査区 調査状況（北西から）



図9 東側土塁調査区 切石入隅部検出状況（切石に小さな矢穴がつく）